

小林 高範

(埋蔵文化財センター主査学芸員)

はじめに

縄文時代の身体装飾品の1つに土製耳飾りがある。後～晩期には関東・中部地方を中心に大量出土がみられ、東日本を中心とした資料の蓄積によって日本列島での大まかな流れが明らかにされている。一方で北陸地方以西の様相は不明瞭な部分が多い。富山県内では近年の調査によって資料数が増加しており、本稿では実態把握のために現在までの県内事例を集成し、その様相を探るものである。

1 研究史

(1) 全国における研究

土製耳飾りに関する研究の先駆けは坪井正五郎で、土偶の耳部表現から初めて耳飾りの機能に言及し(坪井 1906a)、複数資料により栓形・棒形・筒形・滑車形・輪切形などの分類を行った(坪井 1906b・1909)。坪井による「滑車形耳飾り」の呼称は耳飾りの用語として定着をみたが、長谷部言人は結縛崇拝の観点から初期段階には耳孔封鎖の意味を持つとして「耳栓」の新称を提唱し、甲野勇は埼玉県真福寺貝塚資料をすべて耳栓と捉えて滑車状耳栓・透彫付耳栓などの分類を行った(甲野 1940)。吉田泰幸が指摘するように、「滑車形耳飾り」と「耳栓」の2つの名称は本来的には同一形態の遺物に対して観点の違いから付されたものであったが、後に時期差として置き換えられ、中期の鼓状のものを「耳栓」、後～晩期に大型化して装飾が進んだものを「滑車形耳飾り」と呼ぶことが慣例的となっている(吉田 2008)。なお、吉田は耳飾り全般の分類体系を整理して块状耳飾、垂飾形耳飾と合わせて「栓状耳飾」を提唱し、土製のものを「土製栓状耳飾」と表現した。(吉田 2003・2008)。

全国的な動向や発展過程の研究には、樋口清之による基礎研究がある。形態をA～Cの3類に分けて変遷と系統性について言及した(樋口 1941)。その後関東・中部地方の資料増加があり、百瀬長秀は施文と形態の関係に着目して、中期(誕生)→後期～晩期前葉(発達)→晩期中葉(消滅)の3段階の変遷を想定した(百瀬 1979)。設楽博己は形態と文様を組み合わせた類型分類と大きさの分析により、後～晩期における変遷過程をⅠ～Ⅲ期にまとめた

(設楽 1995)。画期設定に若干のずれがあるものの、百瀬と設楽の3期区分は現在まで踏襲されている。近年では吉田泰幸の中～晩期の包括的な研究(吉田 2003・2008)、吉岡卓真による後～晩期の詳細な動態把握がある(吉岡 2014)。

土製耳飾りの起源に関する問題に目を向けると、高山純は中期における「耳栓」の分類を行い、土製块状耳飾りに祖形を求めた(高山 1965・2010)。これに対し、藤田富士夫は体部に窪みをもつ滑石製管玉状石製品からの派生を想定し、土製块状耳飾りからの系譜を否定した(藤田 1971・1975)。

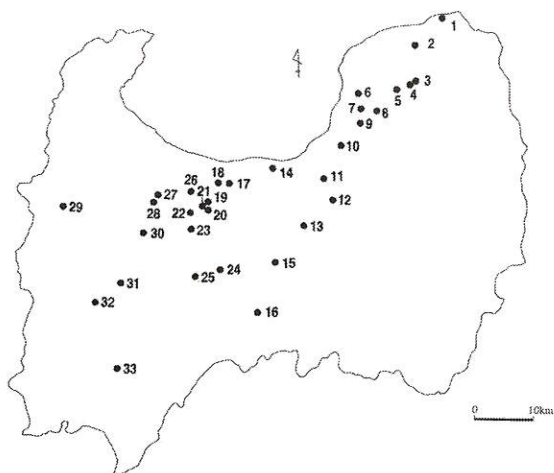


図1 遺跡位置図(番号は表1と対応)

近年では吉田泰幸が土製块状耳飾りについて形態を4類に分類し、高山モデルに準拠して石製块状耳飾（早期末～中期初）→土製块状耳飾（前期後半～）→土製栓状耳飾（中期初～）という3段階の変遷を想定した（吉田 2006）。

大きさについて渡辺誠は、後～晩期資料にみられる直径の多様性から、成人式から死に至るまでに耳たぶの伸張と耳飾りの付け替えがなされたとした（渡辺 1973）。その後、大きさの計測分布から付け替え段階を読み取る試みが行われた。大塚和義は大きさを4段階に設定し、民族例から10歳前後で最初の耳たぶへの穿孔がなされるとし、通過儀礼に伴う身体装飾と理解した（大塚 1988）。金成南海子・宮尾亨は後～晩期の1,000点弱の資料を1cm単位で計測し、寸法の多い2つのピークを成年式と婚礼儀式に相当するとした（金成ほか 1996）。

(2) 県内研究

本県においては、昭和47年の『富山県史 考古編』及び『郷土のあけぼの—富山県考古展』の中で中期2遺跡2点、後～晩期4遺跡11点の報告があり、極めて少ない状況であった。

昭和40年代末～50年代に徐々に資料が蓄積され、昭和60年代以降、資料数は増加した。

県内研究の既往のものに、小島俊彰による滑川市本江遺跡資料の分析がある。刺突を伴った弧線文から後期後半～末の時期比定を行い、径5～6cm台のものが多くを指摘した（小島 1979）。また、朝日町境A遺跡調査報告書では孔や文様の有無、長さや厚さを組み合わせた5分類（富山県教育委員会 1992）、魚津市早月上野遺跡調査報告書では臼形と環状に大別した2分類（公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2012）があるが、詳細分までには及んでいない。土製耳飾り研究の中で本県の情報は抜け落ちている。

2 県内の土製耳飾りの分布状況について

これまでに確認したものは33遺跡132点がある（図1、表1）。これには前期の土製块状耳飾り（小竹貝塚、極楽寺遺跡）も含む。

遺跡の分布状況をみると県内全域に及んでおり、前期2遺跡、中期17遺跡（前葉5、中葉

No.	所在地	遺跡名	時期	出土点数	実測図番号
1	朝日町	境A遺跡	中、後、晩期	27（中3、後～晩24）	44. 48. 49. 52. 53. 60～62. 64. 68～74. 80. 81. 83. 84. 92. 92. 97. 98
2	"	柳田遺跡	後～晩期	2	
3	黒部市（旧宇奈月町）	愛本新遺跡	中期中葉	2	
4	"（"）	風野遺跡	後～晩期	1	
5	"（"）	浦山寺蔵遺跡	中期中葉～後葉	2	26. 28
6	"	田家遺跡	後～晩期	1	
7	魚津市	天神山遺跡	中期中葉	1	27
8	"	桜峠遺跡	"	1	
9	"	石垣遺跡	後～晩期	7か	46. 47
10	"	早月上野遺跡	"	9	44. 51. 57. 63. 65. 75. 76. 94. 95
11	滑川市	本江遺跡	後期後半～晩期初	11	
12	上市町	極楽寺遺跡	前期末～中期初	3（土製块状耳飾り）	9～11
13	立山町	金剛新遺跡	後～晩期か	3か	
14	富山市	浜黒崎野田・平榎遺跡	後期～晩期前半	10	50. 54. 59. 66. 67. 78. 79. 82. 85. 86
15	"（旧大山町）	東黒牧上野遺跡	中期中葉	1	
16	"（旧大沢野町）	布尻遺跡	晩期前葉	1	96
17	"	北代遺跡	中期後葉	3	29. 33. 34. 36
18	"	小竹貝塚	前期後葉～末	4+4（土製块状耳飾り）	1～8
19	"	古沢遺跡	中期中葉	1	
20	"	杉谷I遺跡	中期前葉	1	
21	"	杉谷67番遺跡	晩期か	1	77
22	"	関ヶ丘孤谷III遺跡	中期前～中葉	3（前葉2、中葉1）	19. 2
23	"（旧婦中町）	鏡坂I遺跡	中期前葉	4	14～17. 21
24	"（旧八尾町）	長山遺跡	"	1	16
25	"（"）	離尾II遺跡	中期前葉	1	
26	射水市（旧小杉町）	針原西遺跡	中期後葉	1	35
27	"（旧大門町）	布沢東遺跡	後期末～晩期初	1	58
28	"（"）	串田新遺跡	中期後葉	1	30
29	小矢部市	桜町遺跡	後期末か	14	37～43. 55. 56. 87～91
30	砺波市	蔵照寺遺跡	中期前葉	3	12. 13. 18
31	"（旧庄川町）	松原遺跡	中期中葉	4	22～25
32	南砺市（旧井口村）	井口遺跡	後～晩期	1	
33	"（旧平村）	東中江遺跡	中期後葉～後期初	2	31. 32

表1 県内の耳飾り出土遺跡一覧

8、後葉 4)、後～晩期 14 遺跡である。資料数では前期 11 点、中期 35 点、後～晩期 86 点ある。遺跡数では中期段階が最も多いが、1 遺跡からは単体もしくは数個程度の出土である。後～晩期では 10 個以上の類例があり、土製耳飾り装着の慣習が定着化したと捉えられる。

3 県内の土製耳飾りの様相について

耳飾りの形態について設楽分類（設楽 1995）を参考にして 1 種（棒状 42.42）、2 種（柱状 1～4.38～41）、3 種（臼状 12.14～20.22～26.29～31.44.45～54.60～62）、4 種（環状 27.32～34.37.63～67.69～98）、5 種（片方が大きく段をもつ凸状 13.58.59）、6 種（片方が緩やかに広がるラッパ状 21.28.35.36.55～57）の 6 種に分類した。1～4 種は直径と長さの比率により分けたもので、1 種は 1:2 以上、2 種は 1:1～2 未満、3 種は 1:0.5～1 未満、4 種は 1:0.5 未満である。なお、1 種以外は孔を開けたものと無いものの両方がみられる。

前期では、小竹貝塚から 2 種がみられる。また、小竹貝塚と極楽寺遺跡では土製玦状耳飾りがある。吉田分類（吉田 2006）によれば、小竹貝塚 5～8 は C 類（側面が丸味を帯びる）、極楽寺遺跡 9、10 は D 類（側面が直線的）、11 は B 類（側面に突起をもつ）に相当する。

中期では、前葉に 3 種、5 種、6 種がみられる。3 種は時期が新しくなるにつれて大型化し、器壁が薄くなる。なお、開ケ丘狐谷Ⅲ遺跡では 19、20 が竪穴住居から出土しており、1 対のものと思われる。6 種は鏡坂Ⅰ遺跡 21 のほか、杉谷Ⅱ遺跡、古沢遺跡でも類例がある。後続の浦山寺蔵遺跡 28、北代遺跡 36 をみると新しいほど裾部の広がり大きい。4 種は中葉から天神山遺跡 27 があり、後葉の東中江遺跡 32、北代遺跡 33、34 へ続く。

後～晩期では、1～6 種がすべて出揃う。新形態として 1 種があり、桜町遺跡 42、43 は耳たぶに留めるために片側を瘤状としている。2 種は中期に一度途絶えたが、再び用いられる。

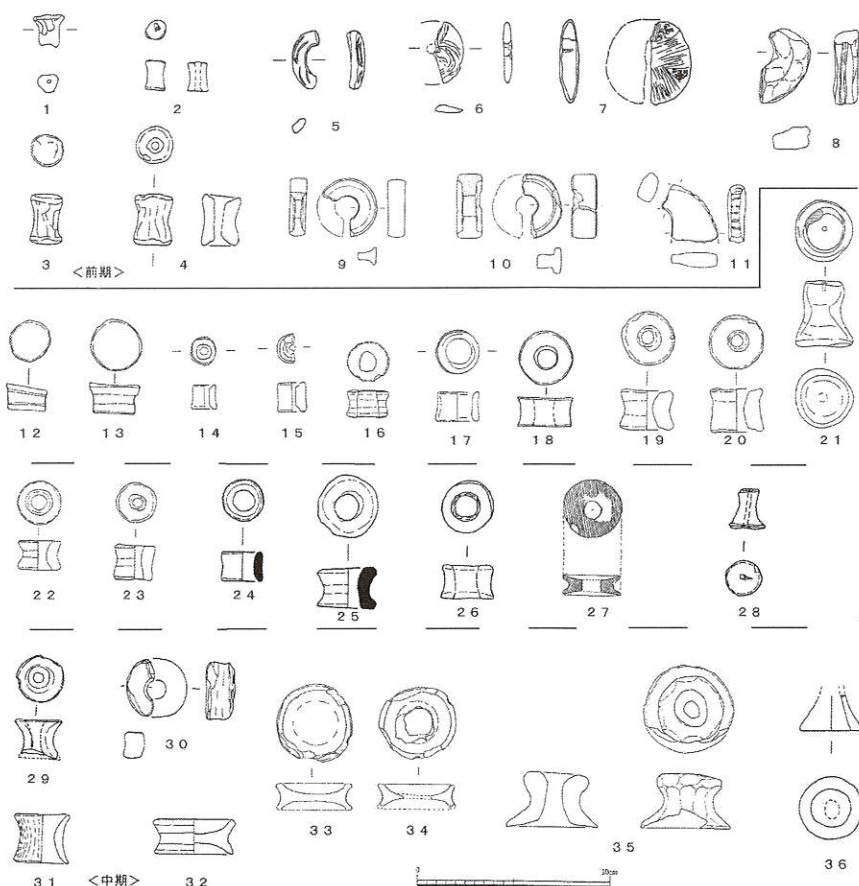


図2 富山県内出土の耳飾り実測図①(前～中期)

る。3 種は中期から一転して小型品が主体となる。4 種は直径の大きなものへ移り変わり、細かな文様が描かれる。ブリッジの施された浜黒崎野田・平榎遺跡 66 も出現する。5 種は小型の浜黒崎野田・平榎遺跡 59、突起の付く布目沢東遺跡 58 がある。6 種は桜町遺跡 55、56 に引き継がれ、内外面に赤色漆が塗られている。文様等の装飾をみると、陽刻した雲形文を描いたもの

(62.63)、十字状のもの(61.64.65)がある。ほかに施文として楕円形工字文(76)、三叉文(87~94.96)、玉抱き三叉文(95.98)がある。

以上から県内の様相についてまとめてみる。

第一に、前期後葉段階に柱状タイプの2種がみられる。これまで土製耳飾りの初段階は関東地方の類例から中期初頭の五領ケ台式期とされており(金成・宮尾 1996 他)、それを遡るものである。また小竹貝塚では石製玦状耳飾り、土製玦状耳飾りが出土しており、同時期に3種の異なる耳飾りが併用されていたとみられる。吉田氏の想定した耳飾りの変遷(吉田 2006)は整合せず、系譜や耳飾り使用の在り方についての再検討が必要であろう。

第二に、臼状タイプ3種に変遷がみられる。中期に大型化し、後~晩期では小型化に向かう。中期の出土数が少ないことと合わせて、これに対する1つの考えを提示しておきたい。中期段階では土製耳飾りを装着できる人が限定され、次第に大型化の傾向に向かう。後~晩

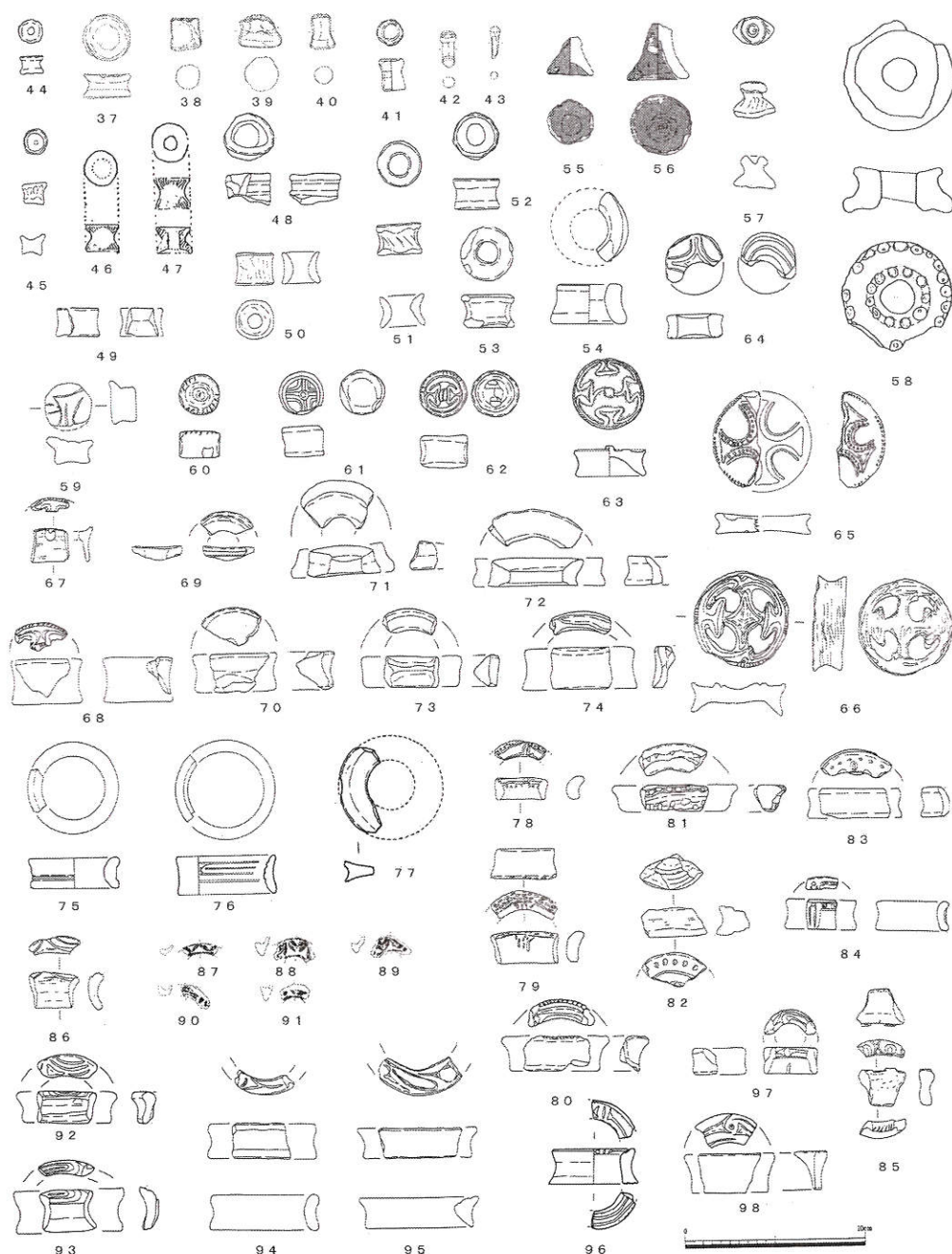


図3 富山県内出土の耳飾り実測図②(後~晩期)

期には通過儀礼の浸透と共に土製耳飾りの形態にバラエティが生まれ、最も簡素な3種は耳飾りを身に付ける初期に使用され、次の段階で大きなもの、装飾性のあるものへと付け替えられたのではないかと想定される。

第三に、ラップ状タイプ6種の変遷がみられる。初期の中期前葉には孔の無い中実だが、中葉に孔があげられ、後葉から後期にかけて裾が大きく広がる。また広い側の内部を抜き取っており、軽量化をはかったものとみられる。系統として前期2種からの変容ではないかと想定される。

第四に、後期後葉に棒状タイプ1種が新出する。先行研究の盛んな関東・中部地方の資料を調べたが、該当する類例は見当たらなかった。土製耳飾りの新形式とみるべきか、あるいは桜町遺跡だけの特殊品とみるべきか。今後の資料増加を踏まえて検討していきたい。

4 今後の課題

県内における土製耳飾りの様相を探ったが、大きさや重量などの属性や文様構成の詳細分析が必要である。また出土点数の少なさが気に掛かる。隣県の新潟県をみると、中期には中越地方を中心に10～50点以上も出土する遺跡がみられる（新潟県立歴史博物館2011）。晩期には上越市（旧中郷村）籠峰遺跡で1,000点以上があり（中郷村教育委員会2000）、県内とは様相が大きく異なる。土製耳飾りの盛行について地域性があると想定され、今後検討していく必要がある。

文献

- 大塚和義 1988 「縄文人の観念と儀礼的世界」『古代史復元2 縄文人の生活と文化』講談社
- 金成南海子・宮尾享 1996 「土製耳飾りの直径」『国学院大学考古学資料館紀要』第12輯 国学院大学考古学資料館
- 甲野勇 1940 「埼玉県真福寺貝塚発見の耳栓」『人類学雑誌』第55号第10号 日本人類学会
- 小島俊彰 1979 「第3章 遺跡・遺物解説 本江遺跡」『滑川市史 考古資料編』滑川市
- 設楽博己 1983 「土製耳飾」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣
- 高山純 1965 「縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一考察」『人類学雑誌』第73巻4号 日本人類学会
- 高山純 2010 『ものが語る歴史19 民族考古学と縄文の耳飾り』同成社
- 坪井正五郎 1906a 「日本石器時代人民の耳飾り」『東京人類学会雑誌』第21巻第241号 東京人類学会
- 坪井正五郎 1906b 「諸人種耳飾り分類上日本石器時代人民所有品の位置」『東京人類学会雑誌』第21巻第242号 東京人類学会
- 坪井正五郎 1909 「土製滑車形耳飾り」『東京人類学会雑誌』第24巻第274号 東京人類学会
- 富山県 1972 『富山県史 考古編』
- 富山県教育委員会 1992 『北陸自動車道遺跡調査報告一朝日町7一境A遺跡総括編』
- 富山県古美術展実行委員会 1972 『郷土のあけぼの—富山県考古展—』
- 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2012 『早月上野遺跡発掘調査報告—北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告V—（第一分冊）』
- 中郷村教育委員会 2000 『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』
- 新潟県立歴史博物館 2011 『平成23年度秋季企画展 いがたの土偶 発掘された新潟の歴史2011』展示図録
- 樋口清之 1941 「滑車形耳飾考」『考古学評論』第4号
- 藤田富士夫 1971 「耳栓の起源について—飾玉の在り方と関連して—」『信濃』第23巻4号 信濃史学会
- 藤田富士夫 1975 「玦状耳飾りの素材の在り方について」『信濃』第27巻9号 信濃史学会
- 百瀬長秀 1979 「土製耳飾に関する諸問題—その最盛期の様相を中心に—」『信濃』第31巻4号 信濃史学会
- 吉岡卓真 2014 「土製耳飾りのサイズと装着」『季刊考古学・別冊21 縄文人の資源利用と社会』雄山閣
- 吉田泰幸 2003 「縄文時代における土製栓状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告』№19 名古屋大学博物館
- 吉田泰幸 2006 「玦状耳飾の装着方法」『日本考古学』第22号 有限責任中間法人日本考古学協会
- 吉田泰幸 2008 「土製耳飾の装身原理」『縄文時代の考古学10 人と社会 人骨情報と社会組織』同成社
- 渡辺誠 1973 「装身具の変遷」『古代史発掘2 縄文土器と貝塚』講談社